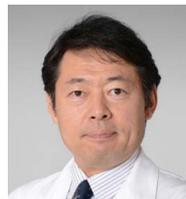




もっとAEDを使用して 助かる命を増やそう



公益財団法人 日本AED財団 常務理事/東京慈恵会医科大学 救急医学講座 主任教授/
慈恵大学病院 救命救急センター長 **武田 聡**(医師)

日本で一般市民がAED(自動体外式除細動器)を使えるようになったのは2004年7月。
今年では日本での「AED20周年」です。もっとAEDを知り、有効活用につなげていきましょう。

一般市民の AED使用が命を救う

突然の心停止の多くは、心室細動と
いう不整脈が原因です。心室細動になる
と心臓がけいれんして本来のポンプの
働きを失ってしまい、そのまま何も処置
をしないと、1分ごとに7〜10%生存率
が下がり、やがて命を失ってしまいます(心
臓突然死)。

心室細動の最も有効な治療法は、AED
による電気ショックです。心停止で倒れた
方のそばに居合わせた一般市民の方が、
1分1秒でも早くAEDを使用するこ
とが救命につながります。救急隊を待つて
いては手遅れになりかねず、現場に居合
わせた一般市民の方の対応が最も重要と
なります(図1)。

設置が増えた一方で、 まだ少ないAED使用率

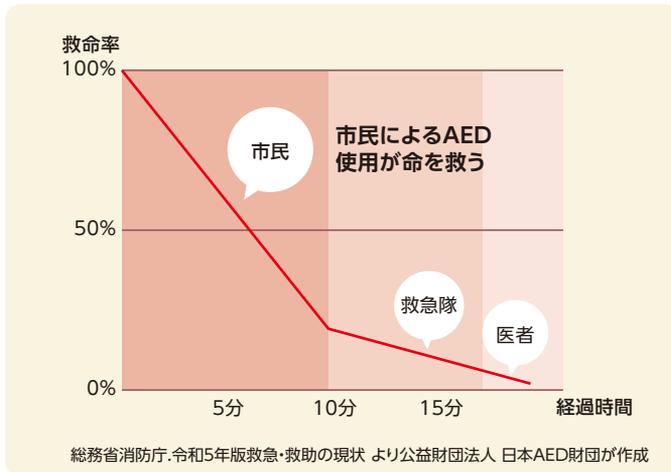
この20年で街中へのAED設置台数は急
速に増え、現在では推計約67万台と世界で
もトップクラスの台数が日本国内に設置
されています。

総務省消防庁の調査(図2)によると、1
年間に心停止となった14万2728人の
うち、心臓が原因だった心停止が9万1
498人、そのうち倒れる瞬間を目撃さ
れた心停止は2万8834人でした。救
命の可能性が高いこの「目撃あり」の心停
止のうち、救命処置(胸骨圧迫)が行わ
れていたのは約6割の1万7068人
だったのに対して、一般市民によりAED
が使用されたのはわずか1229人。「目
撃あり」の心停止に限定しても、AEDが

図2 救急搬送された心肺機能停止傷病者の状況



図1 心停止から電気ショックまでの時間と救命率



使われたのは4.3%と、残念ながら、ま
だまだ日本におけるAEDによる電気
ショック実施率は少ないのです。

AEDで 「スポーツ中の突然死」をゼロに

東京マラソンでは、過去16回の大会中に
11人の心停止が起っています。どのくら
いの方が救命されたか、ご存じですか。

東京マラソンでは、AEDを携行して
定点に配置されているBLS(次救命
処置)隊に加え、自転車でもAEDを背
負って巡回するモバイル隊も配備され、何
かあれば一刻も早くAEDを使用した電
気ショックができる体制が整っています。
この充実した体制により、心停止した全
例(100%)が救命されています。やればで
きる「スポーツ中の突然死ゼロ」を、東京マ
ラソンが証明していると言えるでしょう。
この20年で、AEDは身近に設置されて
いる「あつて当たり前」なものとなりまし
た。次の10年で、AEDが私たちにとって
「当たり前前に使用するもの」となるため
に、「AED20周年記念サイト」で、もっと
AEDのことを知ってください。一人でも
多くの方を心臓突然死から救命するた
めに、AEDを有効に活用していただ
きたいと思えます。

いろいろなイベントの開催が
予定されています。
詳しくはこちらをご覧ください。

日本AED財団
「AED20周年記念サイト」
<https://aed20th.com>